

アルザス、仏独の狭間に輝く特異な地域

第 148 回 フランス・アラカルト開催（10/9）

10月9日(土)、生駒セイセイビル会議室で、第148回フランス・アラカルトを開催し、会員17名と、一般4名の方が参加しました。冒頭の三野会長の挨拶のとおり、今年は、美術クラブ、シネクラブ、放送大学との共催講演会の3回の企画が、コロナ禍のせいで連続して中止となっていて、今回は、久しぶりの開催だったこともあり大いに盛り上がりました。講師は、ちょうど50年前にストラスブール留学に出発して2年間お過ごしになり、その後も4回旅行したというアルザス通の濱恵介会員。地理、歴史、言葉、建築、音楽、料理とお酒、観光、さらには鉄道や運河にいたるまで幅広い話題で、参加者の方々も熱心に耳を傾けられていました。講話のあと参加者から感想をお話いただきましたが、私が個人的に印象に残ったのは、船を水ごと45m上へ運ぶ斜行エレベータ式のインクライン、マルセイエーズが実はストラスブール生まれだったこと、フランスのビールの9割方がアルザスで造られているということ、それに美味しそうな料理とワイン。お話を聞かずにますますフランスに行きたくなって困ってしまいます。(杉谷健治)

講師の濱さんにとって宝物になっている50年前に国費留学をされたアルザスについてのお話を聴くことができました。講演後、参加者の大半がアルザスに行ったことがあると応えておられたことに驚きました。しかし、各自、訪れた時期も期間も目的もまちまちで、2年近く暮らしておられた濱さんの多様な話題ながら分かりやすい説明によって、思い出が蘇ってきたかもしれません。昨今はバーチャル旅で行ったつもりという人もいますが、やはりその場に行き、体感したものしか心に残る自分の宝物にはなりません。数年前から耐震化のために建て替えができない建物に筋交いの補強がされているのを見て、コロンバージュと似ていると思っていました。耐震化だと思えば無料に見えますが、アルザスの町並みで見かけると素敵なデザインだと思うのは、何とも不思議なことです。参加者感想の中で、坂本前会長がご自身も50年前の濱さんと同時期に、フランス国鉄(SNCF)での研修でフランスに1年間滞在していたことを懐かしい思い出として話されました。今年から入会されたフランス人のバチスト・レタヨさんが、50年前のご自身が生まれる以前に、フランスでフランス語を話していた濱さんに敬意を表され、会場の皆さんから笑みがこぼれました。(藺田章恵)

半世紀近く前、私が初めて妻と一緒に暮らした懐かしいアルザスについて皆様にお話でき、まことに嬉しく存じました。もう半年前のこと、「次のフランス・アラカルトでアルザスをテーマに話題提供を」と杉谷事務局長から依頼を受け、喜んでお引き受けしたものの、十分な素材や知識があるのか心もとなく、日本語とフランス語のインターネットでいろいろ調べながら、プレゼンの構想を練りました。こうして私の曖昧な知識に客観的裏付けとなる新たな情報が加わり、考えを再整理することができました。あれもこれもと欲張った結果、総花的な内容になったかもしれません。しかし、これは私のアルザスに対する深い想いの表現ですから、ご容赦いただけたと思います。さて、まとめの段階でアルザス出身の友人達にいくつかの問い合わせをしました。そのためにMon Nara 通信の予告記事をフランス語に訳してフランス人の語学教師に校正してもらい、これを添付しました。返信の中には質問への回答に加えて文章の改善提案があり、後者の成果が配布したレジュメの3枚目です。アラカルトを機会にフランス語の勉強や古い友人達との交流もでき、良いことづくめでした。関係者の皆様の周到なご準備と当日の運営に心から感謝します。(濱恵介)



上：ストラスブールのサンテチエンヌ広場
下：ケゼルスペールのワイス川



「モリエールの喜劇」(9)『町人貴族』(Le Bourgeois gentilhomme, 1670)

山本 邦彦 (やまもと くにひこ)

『町人貴族』はシャンボール城で初演された5幕散文のコメディ・バレーです。コメディ・バレーというのは、モリエールが作曲家リュリらと共同で考案した新しい劇形式です。簡単に言えば、従来の劇の幕間に音楽と踊りを挿入するというもので、もっぱら王侯貴族の注文に応じた祝祭用の劇でした。その最大の注文主はもちろんルイ太陽王です。彼は陽気で単純な内容の劇を好みました。そのうえ歌舞音曲が大好きで、自らも舞台上で踊りたがりました。

このジャンルでは、歌舞は劇内容と遊離して、浮き上がって見えました。最初の作品『うるさがた』(Les Fâcheux, 1661)以後の9作品は皆そうでした。ところが『町人貴族』はそういう違和感が全然なく、歌舞がうまく溶け込んでいる画期的な作品となりました。たとえば第3幕の終わりで料理人たちが踊りながらテーブルの準備を始めるとそれが第4幕の宴会の場に繋がるといった具合で、全く断絶がありません。

この芝居の主人公ジュールダン氏は貴族にあこがれる金持ちの町人です。貴族らしい教養を身に付けようと、音楽の先生、ダンスの先生、剣術の先生、哲学の先生に付いて学んでいます。ものになりそうもありません。仕立屋には宮廷で流行りの服と称して珍妙ななりをさせられます。娘リュシールの求婚に来たトルコ王子(実は変装した娘の恋人クレオント)にだまされて、トルコ風の儀式に巻き込まれたりもします。徹底して笑劇風の芝居ですが、しかしそこには貴族の猿まねをする平民を風刺するモリエールの立場がはっきり読み取れます。「貴族の肩書きは無用。町人は町人のままでよい」、モリエールはそう考えていました。

この作品は内容が平易で、動きも多く、大勢の歌手や楽士やダンサーが登場して華やかですから、子どもたちにも大人気です。ふくよかな顔立ちでおおらかな演技をするルイ・セニエが、近年稀に見る大当たりのジュールダン役者として名を馳せました。



コメディ・フランセーズ
右:ルイ・セニエ(ジュールダン氏)
左:ジョルジュ・シャマラ
(哲学の先生)

私の好きなワイン(3)「ワインとフランス文学」 小寺 順子 (こてら じゅんこ)

「きょうママが死んだ」で始まるあまりにも有名な小説『異邦人』(L'Étranger, 1942)の主人公「ムルソー」と同名のワインが、ブルゴーニュにある。黄金色をしていて、樽の香りとミネラルが感じられるのが特徴だ。とはいえ、製造年と生産者によって味わいもさまざま、私も時々飲む機会があるが、「あら、これがムルソーだったかしら?」と思うこともある。「ワインのムルソー」と「カミュのムルソー」の間に関係があるのかどうかについて、カミュ研究者の三野会長に尋ねると、異邦人のムルソーはワインから取った名前であるとカミュが言ったという証言があるが、カミュ(1913-1960)が本気でそれを言ったかどうかはわからないそうだ。両者の直接的な関係は不明にしても、カミュがムルソーを飲みながら執筆していたかもしれないと想像すると、何だか嬉しくなってしまう。

フランス文学とワインの関係という他にもある。ボルドーの「シャトー・マレスコ・サン＝テグジュペリ」である。この名はシャトーの持ち主だったシモン・マレスコと後にシャトーを買い取ったサン＝テグジュペリ伯爵の名からつけられた。マルゴーでメドック3級の格付けである。『星の王子様』(Le Petit Prince, 1943)の作者アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ(1900-1940)は、この伯爵のひ孫に当たる。

さらに、「シャトー・ミッシェル・ド・モンテーニュ」がある。これは南西ベルジュラックのワインで、『エッセ』(Les Essais, 1580, 1582, 1587, 1588)の著者モンテーニュ(1533-1592)のシャトーである。彼は38歳頃から59歳で亡くなるまでこのシャトーの「塔」にこもって読書と思索を続けたという。このワインは非常に重い赤の典型的なベルジュラックワインである。私はもう10年以上前にもなると思うが、主人とベルジュラック地方を訪れた。当時はまだワインに関しては駆け出しだったが、ワインを2本ほどお土産に買って帰った。どんなワインだったかは覚えていない。近くにモンヴァジャックという甘口のデザートワインの産地もある。そして近くにはロカマドールというあの有名なチーズの産地もある。南西ワインはあまり日本では飲まれていない。私も今まで飲み忘れていたのでこれを機会に南西ワインを飲んでみたいと思っている。



左:ラヴェルにモンテーニュの作品のタイトルと肖像画が描かれたワイン
右:モンテーニュの「塔」『モンテーニュとの対話』
荒木昭太郎著, 春秋社, 2007年

ホームズ物語とフランス（４） 長谷川 明子（はせがわ あきこ）

本来の宗教的意味を離れて、人気アニメや映画、TVドラマなどの舞台となった場所を訪れることを「聖地巡礼」と呼び、新海誠監督のアニメ作品『君の名は』(2016)の舞台となった飛騨市古川町の図書館や神社に、インバウンドの観光客が大挙押しかけたという出来事があった。コロナ禍でこのような旅も下火になってしまったが、ホームズファンにとっての「聖地巡礼」は、まずロンドンのベーカー街、そしてスイスのライヘンバッハの滝であろう。別荘に籠ってホームズ物語を全訳した延原謙を記念して、等身大のホームズ像が建てられている軽井沢追分の庚申塚公園は、さしずめ日本の聖地である。ではフランスではどこだろうか？

「最後の事件」(1891)や「金色の鼻眼鏡」(1894)には、フランス国内の事件解決に貢献して多額の報奨金をもらったり、レジオンドヌール勲章をもらったりしたことが述べられていて、何度もフランス国内に足を運んでいるホームズの姿が浮かぶ。たとえば「最後の事件」では、ストラスブールの食堂でワトソンにロンドンへ帰るよう論ずるが、聞き入れられなかった。「ライゲートの大地主」(1892)では、フランス国内の事件解決のため奔走するホームズが、過労のため倒れ、リヨンのディロン・ホテルから助けを求める手紙をワトソンに出している。とはいえ、ストラスブールとリヨンを「聖地」と呼ぶには滞在期間も短くエピソードが足りないように思える。

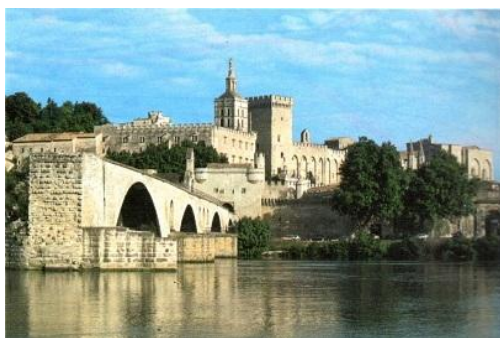
「空き家の事件」(1894)では、大空白時代（「最後の事件」でライヘンバッハの滝に落ちて死んだと思われていたホームズが、この作品でワトソンの前に再び姿を現すまでの約3年間）を終えたホームズが、コールタール誘導体の化学実験を行うために、南仏のモンペリエに数か月間滞在している。モンペリエはまた、「フランシス・カーファックス姫の失踪」(1902)において、事件の証人となる人々が集まる重要な場所になり、酒場で張り込んでいたホームズが、ワトソンの危機を救う場面もある。前述の「最後の事件」では、ホームズの手紙がニームとナルボンヌからワトソンに届いており、南フランスに読者の関心は集まる。

「ギリシャ語通訳」(1893)では、ホームズは自分の祖母はヴェルネというフランスの画家の妹で芸術家の血統だと言っている。ヴェルネ家は、アヴィニョンの画家の家系で、海景画家のクロード＝ジョゼフ・ヴェルネ(1714-1789)がもっとも知られているが、父は装飾画家、息子のカルル・ヴェルネ(1758-1836)、孫のオラス・ヴェルネ(1789-1863)と、いずれも画家である。年代から考えると、言及されているのはクロード＝ジョゼフの孫のオラスのことではないかと推察される。アヴィニョン市内のカルヴェ美術館には、ヴェルネ一族の関連作品が所蔵されている。南フランスはホームズ物語の「聖地」とであると言ってもいいだろう。



左上：ジョゼフ・ヴェルネ『朝の海』
1766年、カルヴェ美術館所蔵
Le Guide Vert, Provence, Michelin

右上：オラス・ヴェルネ『嵐を研究するジョゼフ・ヴェルネ』1822年（祖父が船上で嵐に遭遇した時、これは好機とマストに自分をくくりつけて嵐の様子を観察したという逸話を孫のオラスが絵画化）、カルヴェ美術館所蔵



左下：アヴィニョンのサンヴェネゼ橋と教皇宮殿遠景（アヴィニョンは1309年から1377年までの約70年間、教皇庁がおかれたことや、「アヴィニョンの橋の下で」の歌と踊りでも知られている）
Le Guide Vert, Provence, Michelin

右下：モンペリエ大学医学部（モンペリエは現在も学生の街として知られるが、とりわけモンペリエ大学医学部はヨーロッパ最古の医学部のひとつで、フランソワ・ラブレやノストラダムスもゆかりの人物。ホームズはこの町の学際的な雰囲気が入っていたのかもしれない）
撮影：川下裕史（会員）

レオス・カラックスの新作『アネット』

ピエール・シルヴェストリ

Explorer sa vision coûte que coûte, c'est ce que fait Leos Carax depuis *Boy meets girl* (1984), son premier long métrage, véritable ovni dans le cinéma des années 80. Après le suivant, le très remarquable *Mauvais sang* (1986), le cinéaste a connu de grands problèmes de production en réalisant le flamboyant *Les Amants du Pont-Neuf* (1991).

A la suite de cette trilogie des Alex, prénom du personnage principal masculin récurrent interprété par Denis Lavant, il aura fallu huit ans pour que Carax livre un nouvel opus d'une grande beauté qui s'intitule *Pola X*.

Son échec commercial va empêcher le metteur en scène de tourner jusqu'en 2008 (moyen métrage *Merde* qui fait partie d'un triptyque sur Tokyo). Il signe ensuite son grand retour avec *Holy Motors* (2012) qui fait sensation et enthousiasme la critique.

Ce réalisateur possède une vision forte, et se donne les moyens de la mener à son terme, comme peu en sont capables. Qui d'autre que lui aurait pu accoucher d'un projet aussi fantaisiste, d'une proposition aussi radicale qu'*Annette* (2021, 140 minutes) qui a enflammé le dernier festival de Cannes ?

La folle composition musicale et le scénario original des Sparks, groupe fondé par les frères Mael, est à l'origine de l'œuvre qui a ensuite été retravaillée avec Carax.

Annette est un opéra pop qui constitue un festival sensitif dont les enregistrements vocaux et musicaux ont été réalisés en direct sur le plateau.

La lumière parfaitement soignée de Caroline Champetier illumine des comédiens qui parviennent à jouer, à chanter avec naturel et intensité. Marion Cotillard (Ann) confirme qu'elle est à l'affiche de projets toujours plus fous et qu'elle peut tout jouer, tandis qu'Adam Driver (Henry) impressionne par sa présence physique. Son visage grave révèle au fur et à mesure du film un peu plus du potentiel monstrueux de son personnage.

Carax laisse peu à peu sa place à *Annette*, la fille d'Ann et Henry, jusqu'à ce qu'elle devienne le centre d'une histoire qu'elle aura traversé avec le corps d'une marionnette. Elle sera la clé d'un dénouement tendre et déchirant, porté par l'affection et la rancœur.

(Pierre Silvestri)

何としてでも自身のヴィジョンを探究する、それが最初の長編『ボーイ・ミーツ・ガール』(1984)以来、レオス・カラックスのしていることであり、この作品は1980年代の映画界にまぎれもない衝撃だった。続いて傑出した作品『汚れた血』(1986)を撮り、さらに燦然と輝く『ポンヌフの恋人』(1991)の撮影では、監督として製作上の大きな問題に遭遇した。

ドニ・ラヴァンが演じる、繰り返しあらわれるアレックスの名をもつ男性主人公によるアレックス三部作に続いて、『ポーラX』(1999)と題する非常に美しい新作を送りだすのに、8年もの歳月を要してしまった。『ポーラX』の商業的失敗により、監督は2008年の中編『メルド』(東京に関する三部作のオムニバス映画の一篇)まで撮影から遠ざかる。そして、いかにもカラックスらしい作品『ホーリー・モーターズ』(2012)で帰還をはたすと、注目を浴び、批評家を熱狂させる。

この映画監督は強いヴィジョンを持ち、それを貫徹する手法を自分のものになっている。彼はそれができる数少ない人間だ。いったい彼以外の誰が、最新のカンヌ国際映画祭を沸かせた『アネット』(2021, 140分)ほどに、空想的な企画とラディカルな提起を生み出すことができただろう。

この作品の土台には、破天荒な音楽の制作と、メイル兄弟から成るグループ、スパークスのオリジナル・シナリオがあり、それをカラックスと共同して手直したのがこの作品である。

『アネット』はポップ・オペラで、声と音楽の録音はスタジオセットでの生収録で行われ、感覚を刺激する音楽祭典を作りだしている。

カロリーヌ・シャンプティエによる完璧なまでに入念な照明は役者たちを輝かせている。彼らは自然な激しさで演じ歌うことに成功している。マリオン・コティヤール(アン)は、いつも狂気じみた企画にキャスティングされ、そのすべてを演じられることを自ら確信している。それに対しアダム・ドライバー(ヘンリー)は、身体的な存在感で強い印象をあたえる。彼の重々しい顔は、映画が進むにつれて、彼の人物像の怪物的な潜在力を露わにさせる。

カラックスは少しずつアンとヘンリーの娘のアネット(人形が演じている)に場所をゆだね、彼女が人形の体で経験する物語の中心となる。彼女は、愛情と恨みを負った優しく悲痛な結末の鍵をにぎる。



『アネット』は、第74回カンヌ国際映画祭(2021年7月6日～17日)にてオープニング上映され、監督賞を受賞した。

歩く楽しさ

小林 安貴子(こばやし あきこ)

何処へでも歩いていこう、野の道、山の道、海辺の道を。歩けば自然や、歴史の物語と出会う。

ウォーキングの会『古道紀行』に参加して 15 年になる。詩人 Y・T 氏が主宰するこの会は近畿一円を巡り、285 回を重ねている。

氏は飄々と歩き、史跡の解説など一切しない。思い思いに心を遊ばせる。参拝したり、由来縁起を読んだり、古木を仰ぎ見たり、ただぼんやりうろついて休憩時間を過ごす、この自由感がたまらない。

コロナ禍の前年、思いがけずフランスにつながる地二ヶ所とめぐりあった。秋明菊の咲くころ、紀見峠を越えて高野街道を天見から橋本まで歩いた。紀見峠には「岡潔生誕の地」(父祖の地)の立て札と、フランス語で書かれた記念石碑が立てられていた。「岡潔は変わり者だったらいい」などと、仲間たちときままなおしゃべりに興じた。翌日から、「岡潔・数学の詩人」や小林秀雄との対談集「人間の建設」を読んだ。歩くことは、読書のきっかけにもなる。



天理から田原本まで歩いた日は唐子・鍵遺跡に立ち寄った。

年が明けて 1 月、E T V 特集「反骨の考古学者 ROKUJI」が放映された。予めその情報を入手していた私は、仲間にも広めた。反響が大きく、こんな葉書きも知人から届いた。

「ご案内いただいた森本六爾さんを取り上げた番組、録画にとり今日視聴しました。放送用にうまくドラマ化されてはおりますが、郷土の遺跡唐子・鍵に寄せる氏の情熱が弥生時代の確立にと結実した功績に改めて感動しました。余計かもしれませんが、『放浪記』を書いた林芙美子がパリに滞在した時、当地の日本人仲間と行き来があつて、その中に六爾さんも含まれていて、彼女の『パリ日記』に描かれています。」私はすぐに返事を書いた。

「唐子・鍵遺跡、そして後の弟子による登呂遺跡発見などの弥生文化研究の先駆者だったのですね。土器の小さなくぼみから、もみ殻痕をひらめくなんて、なんて豊かな想像力なのでしょう。それにしても、地方への調査の旅、そしてパリまでも出かけていく学問的情熱はただものではありません。そのころのフランスは、世界の尊敬を集める啓蒙先進国だったようです。岡潔もフランス留学しました。」

番組では、六爾氏がフランス滞在中に読んでいたというポール・ヴァレリーの「精神の危機」(『ヴァリエテ』所収)中の数行に下線が施されているところが紹介されていた。

「水に落とした一滴の葡萄酒は、一瞬 水をほのかに色づけると、薔薇色の煙のようになって消えていく。それが物理的事実である。しかし 薔薇色が消え透明な水に、ほの暗く純粋な葡萄色が、幾滴か姿を現したとしたら何たる驚異でしょう」

創造的な刺激を秘めたヴァレリーの詩に、氏は学問的確信を得たのだろうか。各地に散らばる遺物の断片を集めて体系化する研究につき進んでいく。

私は歩きながら想像する、歴史の深淵に沈んでいった壮大な世界を。その夢のかけらと路傍で出会うとき、私の胸は驚きに高鳴るのである。ロマンを求めて歩いていこう。

ところで、いつだったか、何気なくラジオにスイッチを入れると、あるカメラマンがパリで撮ったたくさんの風景写真から、パリっ子の歩き方に特徴があることに気付いたと語っていた。それは着地した脚が、膝が伸びて直線の形になっているというのである。そこから東西文化の違いに発展してとても興味深かった。

狩猟民族の歩き方は、遠くの獲物を見つける歩き方で、背筋を伸ばして腰の位置も高い。農耕民族は、泥田に足を突っ込みながら歩くので、膝を曲げ腰をかがめて歩く、という説である。

ある日、私は三条通りに面したカフェから観察を楽しんだ。JR奈良駅と奈良公園をむすぶこの通りは外国人観光客がわんさと往来する。短パンからすらっと伸びる脚は長くて、誰もが美しく健やかである。直線であるかどうかはわかりにくかったが、確かにまっすぐ前をみている。獲物を探しているのだな。

フランスにおけるコロナの経験

イヴァン・オラリアガ

Je m'appelle Ivan, j'ai 38 ans. Après avoir étudié l'anglais et le japonais, et avoir passé une année d'études à Osaka, je suis devenu auteur de doublages. Depuis 15 ans, je traduis en français des œuvres étrangères (films, dessins animés, séries) pour en faire ce qu'on appelle la VF (Version Française). Le cœur de mon métier est d'adapter les dialogues afin qu'il soient interprétés en studio par les comédiens de doublage. En plus de rester fidèle aux dialogues originaux, il faut donc également adapter le texte aux mouvements des lèvres des acteurs à l'image.

Mon métier a été impacté (bien que dans des proportions bénignes par rapport à d'autres professions, beaucoup plus touchées) par l'apparition du Covid, et les trois confinements qui ont été instaurés ici en France. L'arrêt des tournages, aux Etats-Unis et ailleurs, ont stoppé la sortie de nombreux films et séries. L'interdiction de se rassembler dans les lieux clos ont de facto sonné l'interdiction des enregistrements dans les studios de doublage. Tout cela a fait que les auteurs de doublages, au bout de la chaîne, ont été moins sollicités.

Cependant, pour moi l'impact du premier confinement a été avant tout psychologique. J'ai le souvenir d'avoir roulé sur des routes désertes, envahies par les corbeaux, pour aller faire des courses dans un supermarché lui aussi désert, aux rayons presque vides. Une scène digne d'un film post-apocalyptique. C'était un environnement totalement inconnu pour la plupart des Français, à moins d'avoir vécu dans un pays en guerre. Je crois que c'est quelque chose qui marquera notre génération, peut-être même plus que le Covid en lui-même.

Par chance j'ai déménagé, seulement quelques mois avant ce premier confinement, en bordure de la forêt de Fontainebleau, après avoir vécu à Paris pendant dix ans. La fermeture des magasins, cinémas, et tout autres espaces intérieurs m'a permis de découvrir cette magnifique forêt, aux paysages très variés, connue des grimpeurs comme des randonneurs.

(Ivan Olariaga)

私の名前はイヴァン、38歳です。英語と日本語を勉強し、大阪で1年間勉強した後、吹き替え作家になりました。以来15年間、外国語作品（映画、アニメ、連続ドラマ）をフランス語に翻訳し、いわゆるVF（フランス語ヴァージョン）を作成しています。私の主な仕事は吹き替えの役者さんたちがスタジオで演じる会話を翻案することです。元の台詞に忠実であるだけではなく、映像上の役者の唇の動きに合わせて、テキストを脚色しなくてはなりません。

コロナの出現によって、私の仕事は影響を受け（もっと大きな打撃を受けた他の職業に比べれば、程度は軽いとはいえ）、フランスでは、3度の隔離が実施されました。アメリカや他の国での撮影中止は、多くの映画や連続ドラマを公開停止にさせました。密閉された場所で集まることが禁止された為、事実上、吹き替えスタジオでの録音もできなくなりました。こうしたことは、さまざまな連鎖の果て、吹き替え作家への仕事が少なくなるという結果をもたらしました。

しかし私にとって最初の隔離の衝撃は、なによりも心理的なことでした。カラスたちに占拠されたひと気のない道路を走ってスーパーに買い物に行きましたが、そのスーパーもまた商品棚がほとんど空っぽで、ひと気がありませんでした（右上写真）。黙示録後の映画のワンシーンのようです。戦時の国に暮らしたことがないかぎり大多数のフランス人にとっては、まったく未知の状況でした。そのことは、もしかしたらコロナそれ自体よりも強く私たちの世代に影響をもたらしたのではないかと思います。

幸い、私はこの最初の隔離の数か月前に、10年間のパリでの生活を経て、フォンテーヌブローの森（右下写真）の近くに引っ越していました。商店や映画館、その他あらゆる種類の室内空間が閉鎖されたために、私は変化に富んだ風景のあるこの素晴らしい森を発見することができました。登山者に知られた森を野山の散策者として。

※イヴァンさんは、2006～2007年の関西大学在学中、奈良日仏協会が主催するシネクラブにも一度参加してくださいました。当協会会員中西ツヤ子さんの義理の息子さんでもあります。（編集部）



1900 年のフランスと日本

白鳥 保二 (しらとり やすじ)

1900 年は 19 世紀最後の年。その年はどのような年だったのか？ フランスでは、日本では、何があったのか？

フランスではベルエポックと言われる時代、エッフェル塔が 1889 年に建設され、建設当時は不評も多かったが、1900 年ごろには、パリの名所としてにぎわっていた。一方、ドレフュス事件は 1899 年、ドレフュスが恩赦を受けて釈放されたが、まだ無罪判決（1906 年）と名誉回復はなされていなかった。しかし、時代はすでにドレフュス事件を過去のものにしてしまっているように感じていた。

プルーストが書きかけの草稿（未定稿『ジャン・サントゥイユ』に収録）をあきらめ、新たに構想した小説『失われた時を求めて』で、ドレフュス事件について登場人物たちに語らせるのは、この十数年後になる。彼は社交界に出入りし、2 年前にオープンしたホテルリッツで、バイセクシュアルの楽しみを持つようになる。ホテルリッツには貴族、富豪、芸術家たちが集い始める。

4 月 14 日、パリ万国博覧会が開催される。第 2 回オリンピックパリ大会も 5 月 14 日に開幕、万国博覧会の一部として 10 月 28 日まで開催された。万国博覧会は 11 月 12 日まで続く。日本はオリンピックには参加していないが、万国博覧会には参加し、多くの出品をしている。絵画・工芸品が主たるものだった。諸外国は、産業・工業の成果を競い合っていた。翌年のはじめ 1901 年 1 月 22 日、ヨーロッパのゴッドマザー、ヴィクトリア女王が死亡。ヨーロッパは戦争の世紀に入っていく。

夏目漱石が 1900 年のパリ万博を見学していたことはよく知られているが、万博について書かれたものはあまりなく、10 月 21 日から 28 日までの短いパリ滞在中（ロンドンへの留学途中）の日記や、妻鏡子宛ての手紙に感想が残されている。ただし、その感想は非常に簡単なもので、「巴里の繁華と墮落はおどろくべきものなり」。「博覧会に行く。美術館を覧る。広大にて覧尽くされず。日本の最もまずし」とある。エッフェル塔にも上って、鏡子宛てにその感想を書いているが、ごく一般的な感想である。漱石作品の中に、フランスやパリについて書かれたものがあるのではないかと、どなたか御存じであれば、教えていただきたいと思います。漱石が『吾輩は猫である』で作家としてデビューするのは、それから 5 年後のこと。

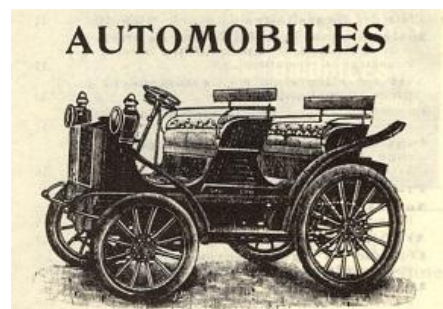
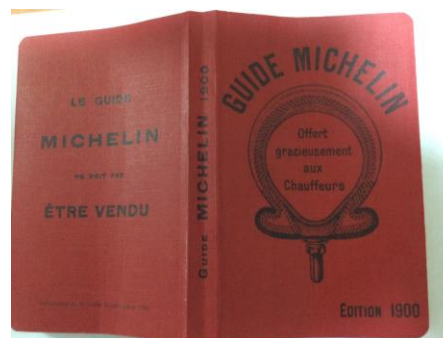
日本ではこの年（明治 33 年）、3 月治安警察法公布、5 月軍部大臣現役武官制確立、6 月義和団事件出兵。また、女子の集会結社禁止、男女混浴禁止なども公布され、日清戦争、三国干渉後、対ロシアや満州進出のための国内引き締め政策がとられている。昭和の戦争への遠因ともいえる。文学では、1 月に徳富蘆花の小説『不如帰（ほととぎす）』が出版され、初版 2000 部が年内に 8 版 9000 部に達するベストセラーとなる。

1900 年にフランスで始まったものの一つにミシュラン・ガイドの創刊がある。パリ万博開催に合わせてタイヤ会社のミシュラン社によって 35,000 部印刷され、無料で配布されたという。現在のものとは内容が全く異なり、レストランなどは掲載なく、ホテルもわずか。390 ページほどの小冊子（文庫本より一回り小さいサイズ）。三分の一ほどは、タイヤや自動車の宣伝、修理方法の解説など。パリは載っておらず、地方都市の簡単な説明（電話や電信局の有無、ミシュランタイヤが購入できるかどうかなど）。1900 年のパリの乗用自動車台数 115 台、二人乗り四輪辻馬車（フィアクル）10,863 台。パリのこのころの写真を見ても、町並みは変わっていないが、路上に行くのは、ほとんどが馬車。着飾った貴婦人や山高帽の紳士が乗り降りする様子が見られる。このミシュラン 1900 年版を読んでいくと、その後のフランスやパリの移り変わりについて、いろいろなことが見えてくる。



上：1900 年のパリ万博

下：1900 年のパリオリンピックで、ブローニュの森を会場に行われた綱引競技



上：1900 年創刊のミシュラン・ガイド表紙

下：上記ガイド中の自動車のイラストの一例

アルザス仏像写真展(2004)と日仏文化交流 本田 倫子 (ほんだ みちこ)

今回は、17年前にアルザス地方で開催された写真展「仏教美術の至宝」(Trésors Bouddhiques)のことを書かせていただきます。

これは、奈良日仏協会が、奈良県とアルザス日本学研究所(CEJA)と共同で、2004年11月11日から28日まで、コルマルのアルザス日本学研究所、11月17日から26日までストラスブールの日仏大学会館に於いて、飛鳥園の小川光三社長(当時)の奈良仏像写真を展示する写真展を開催しました。アルザス地方は、ヨーロッパで最も日本との学術・経済交流の盛んな地で、この写真展の終了後は、写真パネルをアルザス日本学研究所へ寄贈し、その後、欧州各国で写真展が開催されたとのことでした。当時、奈良日仏協会の会長をされていたのが、岡村印刷工業株式会社の岡村元嗣社長(当時)で、全面的な協力を得たのではないかと思います。飛鳥園の小川光三氏に同行したのは、奈良日仏協会の理事であった野島正興 NHK りんくう文化センター長(当時)、岡村印刷工業の中塚康アートディレクター(当時)と、実家である聖林寺の十一面観音像(右写真)もこの写真展に出展されるというご縁もあって、私が通訳を兼ねて参加させていただきました。

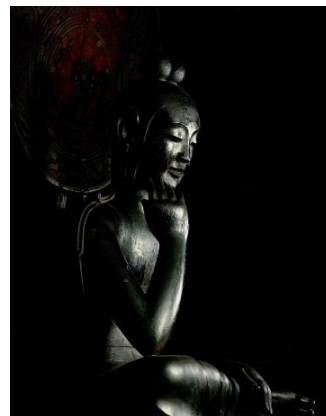
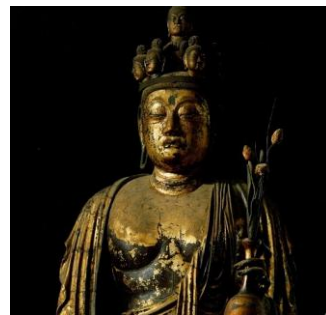
この展覧は、日本文化の象徴の一つである仏像の魅力を追求する写真家・小川光三氏の作品を通して、日仏文化交流を深めるためのもの。コルマルとストラスブールは、フランスでも美しい街の筆頭に挙げられる街で、独特な木組みのあるカラフルな建物が多い街です。特にコルマルの日本学研究所は、緑の多い外光が差し込んで来る素晴らしいロケーションでした。写真展は、法隆寺の救世観音菩薩立像、中宮寺の菩薩半跏像(右写真)や興福寺の阿修羅像等々、日本が誇る仏像とともに、東大寺大仏殿の落陽や、室生寺の雪景色等の大和の美しい風景写真も展示されました。フランスの方々からも好評を得て、メディアでも沢山取り上げていただけました。アルザス日本学研究所の方々には大変お世話になり、レセプションを催していただいたり、アルザスワイン街道への観光にも連れて行っていただきました。

その後、我々は、シャンパーニュ地方のランスへ向かいました。ランスでは、仏日協会前会長のドロンゼ氏にお世話になり、チャペル藤田やシャンパンのカーブを訪れたりしました。そして、丁度この日がボジョレー・ヌーヴォーの解禁日にあたりました。なんだか、写真展以外は、ワインやシャンパンの試飲ばかりの旅となりましたが、フランスらしい過ごし方とも言えますね。

この訪仏中に、小川光三氏による講演会「日本の仏像と古代信仰」もコルマルとストラスブールの二会場で行われました。その講演の中で印象に残っているのが、「三輪山に昇る朝日と二上山の落陽は、大和の住む人々の生活の原点である」という古い言い伝えの話です。水稻耕作が始まった頃、太陽の運行が非常に大事だと考えられていました。磯城郡田原本町の多神社から真東に見える円錐形の美しい山の山＝三輪山から太陽が昇るのが春分の日で、西に見える二上山の二つの峯の間に太陽が沈むのが秋分の日であり、それを合図に稲作をおこなっていました。「日を知る人」＝ヒジリノキミが、天皇が出現するより前までは、稲作を指導するリーダーであったというお話でした。

そして、講演レジュメを読み返してみると、「大神神社の麓に三輪山の神を祀る寺があり、そこに、十一面観音菩薩と地蔵菩薩が祀られました。」とあったのですが、これがまさに、大御輪寺(現大直禰子神社)のことで、神仏分離令の際、離れ離れになった聖林寺の十一面観音菩薩と法隆寺の地蔵菩薩に当たります。その二像が、今年153年ぶりに東京国立博物館に於いて「国宝聖林寺十一面観音―三輪山信仰のみほとけ」展で再会されました。来年2月5日から3月27日までは奈良国立博物館でも展示の予定です。

話が逸れましたが、今後も、このような、フランスと日本や奈良を繋ぐ文化交流が出来ると奈良日仏協会にとっても有意義な活動になるのではないかと思います。



写真：小川光三
『仏像』山と溪谷社(2006)



右から：野島正興氏、小川光三氏、CEJA ご担当者、私

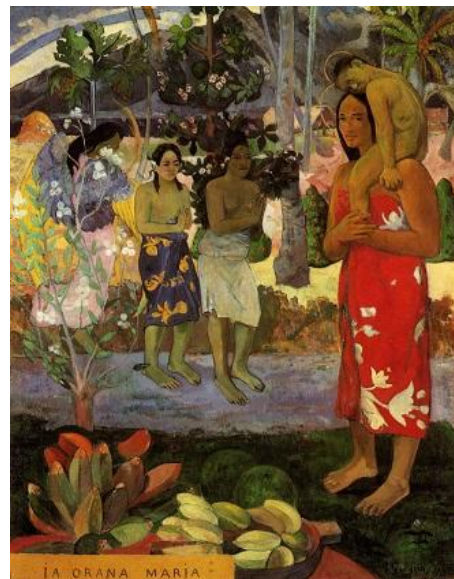
ゴーガンのまなざし

神澤 透 (かんざわ とおる)

フランス絵画は、記録性や文学性が重視されて発達してきたといえよう。造型美の独立性が十分に認識されていなかったとも言える。やがて、その流れに逆らい、絵画が造形美だけで成立し得るものであることを強調する画家たちが現れ始める。その先には印象派の画家たちが待機しているだろう。絵画から文学が途絶えることになるとも言えるのではないだろうか。

フランスでは、植民地に赴き活動する作家たちが現れるようにもなった。自ら描き出す人物、光景を、自分の見たいもののみに構成し、自分の中にある印象だけを語り、対象を単なる興味本位の事物にしてしまう流れが生まれたのである（幸いにして文学史の主流にはならなかったけれども）。植民地文学の世界も、印象に支配されていく。これらの作家たちの描き出す世界は、熱帯的である。そのエグゾティスム（英:エキゾティシズム）に、ポール・ゴーガン（Eugène Henri Paul Gauguin, 1848-1903）は動かされていく。目指す先は、太平洋。フランスから見て対蹠点にあたり、西ヨーロッパという異常なまでの攻撃・侵略・征服の欲望にとりつかれた一文明の進出がもっとも遅れていた地域である。それでゴーガンは、最終的な脱出先にポリネシアを選んだのである。彼は、やがて絵画に物語性を取り戻すことになるだろう。

右の絵は、「イア・オラナ・マリア（マリア拝礼）」と命名されている。この作品は、ゴーガンが1891年4月から1893年6月までタヒチへ滞在した第一次タヒチ滞在期に制作された作品である。ゴーガンが、ポリネシアの信仰に基づく一連の作品に着手する前に、タヒチでの最初の大作にキリスト教の題材を取り上げたものである。赤いパレオの女性は、聖母マリアであり、幅広い肩には、かなり成長した御子イエスを、軽々とかついでいる。「イア・オラナ」とは、タヒチ語で挨拶の言葉で、「おはよう／こんにちは／こんばんは」を指ししめす。タヒチの人たちが、聖母子に挨拶をしているのである。



Ia Orana Maria, 1891 年
メトロポリタン美術館所蔵
『岩波 世界の巨匠 ゴーギャン』

右下の絵は、「アレアレア、たわいない遊び」と命名されている。

タヒチの牧歌的風景や生活と宗教的風習が画面の中に描き込まれている。前景には2人の若いタヒチの娘が1本の樹木の傍らで腰を下ろしながらゆったりと過ごしており、その中のひとは目を瞑りながら細い縦笛を奏でている。また画面左下には一匹の神秘的な動物が配され、観る者に自然と人間の調和的世界観を明確に示している。さらに後景では現地ポリネシアに伝わる月の女神ヒナを順に礼拝する女たちが描かれ、同地の生活的風習と異国的情緒を見事に捉えることに成功している。この作品で最も注目すべき点は、ゴーガンのブルターニュ滞在期から取り組んできた総合主義的表現の昇華にある。輪郭線で囲んだ平坦な色面によって対象を構成するクロワゾニスム的手法を用いた対象要素や構造の単純化と象徴化は、本作では強烈な色彩による色面とその対比によって表されており、タヒチ独特のエグゾティックな雰囲気や様子がよく伝わってくる。



Arearea (Joyeusetés), 1892 年
オルセー美術館所蔵
東京美術『もっと知りたいゴーギャン』

ゴーガンは、ポリネシアの人々の信仰の理解を通し、西洋人の眼差しに加えて、タヒチ人の眼差しをも得ていくことになる。対象（タヒチ人やその慣習、風景等）が主体（ゴーガン）とは異なる論理でもって立ち現われているのである。その理解のために、主体が対象に積極的に働きかけ、対象を「生きた環境」として把握することが重要である。そのようにして、ゴーガンは、自らの西洋中心主義を崩して行ったのである。ゴーガンから影響を受ける作家も出て来るだろう。

堀辰雄とジャン・コクトー

松永 光代(まつなが みつよ)

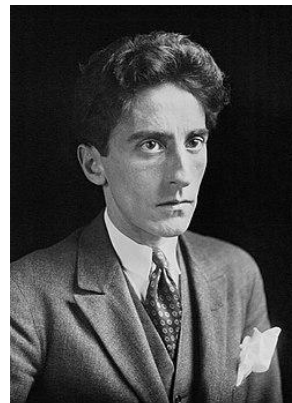
『堀辰雄全集』(筑摩書房)を買い込み、読み始めて早数か月。今頃は、いいアイデアが湧き水の如く溢れ、サクサクと論文が進んでいるはず…でしたが、理想と現実の間には大きな、とても大きなギャップがあるものです。堀辰雄は、1929年に『コクトー抄』という本を出版しています。これは、ジャン・コクトーの様々な作品の一部分を訳して独自に編み直したもので、堀辰雄が日本におけるコクトー受容の初期段階からコクトーの熱心な読者であり、また原文で作品に触れられた数少ない読者でもあることを示しています。

堀辰雄の小説においては、特にその初期の作品にコクトーの影響が色濃いことが先行研究により指摘されています。例えば「手のつけられない子供」という小説がありますが、これはコクトーの『恐るべき子供たち』(*Les Enfants Terribles*)のタイトルそのままですし、小説「ジゴンと僕」のジゴン(ジュゴン)の描写は、『ポトマック』に登場する怪物ポトマックを想起させます。初期の堀作品の代表格ともいえる『聖家族』も、一読するだけで『山師トマ』『大股びらき』などの影響が大きいことが分かります。この他、「天使」「夢」「死」など単語のレベルから表現のレベル、設定、ストーリー展開まで、様々な箇所ですべて「この部分はコクトーの〇〇から来ているにちがいない」と感じるところが多くあり、下心なしに読むことはできません。

では、材料はありそうなのに、なぜ書けないのか。謎は深まるばかりですが、夏の暑さのせいにしておきたいと思います。いよいよ「読書の秋」「芸術の秋」そして「食欲の秋」の到来です。お手元にこの会報誌が届くころ、皆様は、どのような秋をお過ごしでしょうか。



左：堀辰雄 (1904-1953)



右：ジャン・コクトー (1889-1963)

映画『シンプルな情熱』を観て

山岸 多賀子(やまぎし たかこ)

昨年11月の「ペストを読む」の講演会への参加をきっかけに、今年度から奈良日仏協会に入会しました。私はフランス映画のファンで、若い頃に映画はよく観に行きました。フランソワーズ・アルヌールやジャック・シャリエの時代です。日仏協会にはシネクラブでフランス映画を観る機会があることも入会理由のひとつでしたが、シネクラブ例会の他に美術クラブ例会やフランス・アラカルトなどの集まりにも参加しています。

7月に久しぶりに梅田のシネリーブルにフランス映画『シンプルな情熱』(*Passion simple*, ダニエル・アービッド監督, 2020年カンヌ国際映画祭公式出品作品)を観に行きました。少し変わった映画でしたが、興味深くて印象的でしたので、ここで紹介したいと思います。

「去年の9月以降、私は、ある男性を待つこと以外、何ひとつしなくなった」という台詞から始まる物語の主人公の女性(レティシア・ドッシュ)は、この時から恋愛に依存した生活が全てになってしまいます。彼女は大学で教鞭をとり、離婚して小学生の男子を育てていますが、子どもの世話も疎かになりがちです。それまでは映画を観たり本を読む知性的な生活だったのが、男性からの連絡を待つだけという《シンプルな情熱》に支配されてしまうのです。

映画では、男性との出会いの経緯の説明はされていませんが、セルゲイ・ポルーニン(ウクライナ出身の元バレエダンサー)が演じるロシア大使館の要人警護員の、冷たい目で表情に乏しく、女性への愛情があまり感じられないような演技は、この作品に則してのものなのかもしれません。彼女は次第に病んでいきます。しかしある時、しばらくぶりに彼と再会したあと、「ああもう違うんだな」と熱が覚めたこと、その感覚の表現は、分かりすぎるほどよく分かり、その表情が一番心に残りました。

原作は、フランスの現代文学作家アニー・エルノーが1992年に発表した同名小説ですが、映画ではお互いの連絡にスマホ(原作刊行当時にはなかった)を使っていて、今の生活感に合わせていたのが効果的でした。



随想：映画『禁じられた遊び』

角田 茂（つのだ しげる）

ナルシソ・イエペスがギターで奏でる『愛のロマンス』を聴くたびに、私は胸が痛くなる。『禁じられた遊び』のラストシーンが、心に甦ってくるからである。彼の演奏する哀愁に満ちたギターの調べは、いつ聴いても私の心に突き刺さってくる。人は他者の痛みを本当に自分のものになると、心に痛みを感じるものである。共観福音書の中で、イエスが病人や障害者と出会った場面でよく使われる、「深くあわれんで」と訳されるギリシア語は、*splanchnizomai* で、*splanchnon*（内臓）から派生した言葉である。原語の意味は、内臓に痛みを感じるほど、深く同情するということである。世の中では、悪質で残虐な犯罪が後を絶たないが、これらは他者の痛みを自分の痛みとして感じる想像力の欠如によるものと思われる。

映画『禁じられた遊び（1952年）』（右画像）は、フランス映画界の巨匠、ルネ・クレマンの最高傑作である。舞台は第2次世界大戦当時のパリ近郊の農村である。1940年6月、ドイツ軍の侵攻を受け、パリ市民の多くが戦禍を逃れ、列をなし農村へと疎開して行く。その途中、ある家族がドイツ軍の機銃掃射を受け、両親と子犬は即死、幼い娘ポーレットだけが残される。死んだ愛犬を抱いてポーレットが森の中を歩いていると、農家の少年ミシェールと出会う。ミシェールはポーレットを家に連れて帰り、両親に面倒をみてあげるよう必死に頼む。貧しい農家であったが、彼の両親は面倒をみることを約束した。ミシェールはポーレットに、死んだ愛犬のために十字架を立てて墓を作ることと、「主の祈り」を教える。早速ポーレットは、水車小屋の中に秘密の墓を作った。それ以来、二人の秘密の墓作りは、教会の墓地から十字架を盗んで来るところまでエスカレートしていった。



貧しいミシェールの家族はこのままポーレットを、家に置いておくことはできず、赤十字の孤児院に預けることを、ついに決心する。ある日、憲兵がやって来て、彼の両親は、ミシェールの反対を押し切って、ポーレットを孤児院に預ける契約書にサインをしてしまう。ミシェールは自暴自棄になり、風車小屋にある秘密の墓地の十字架をすべて引き抜き、小川に投げ捨てる。一方、ポーレットは、ジープに乗せられ、孤児院に連れて行かれる。この場面、『愛のロマンス』がバックに流れる。実は、この秘密の墓地での出来事を、最初から最後まですべて見ていたものがいた。それは屋根裏部屋のフクロウであった。

20世紀は戦争の世紀と言われるが、その中で最も注目すべきことは、無差別都市爆撃が始められたことである。軍人同士の戦争から、一般市民を巻き込んだ戦争へと進化したことである。第2次世界大戦における無差別都市爆撃は、ドイツ軍によるゲルニカ爆撃（1937年）と日本軍による重慶爆撃（1939年）から始まり、米軍による広島と長崎の原爆投下（1945年）で終わったと言うことができる。この爆撃の特徴は、子どもや女性などの一般市民を巻き込み、多大な犠牲者を出すことである。パブロ・ピカソは名画『ゲルニカ』の中で、またルネ・クレマンは映画『禁じられた遊び』の中で、それぞれ無差別都市爆撃を告発している。

心的外傷（psychological trauma）という概念を精神医学に導入したのは、精神科医ジークムント・フロイトである。心に外傷を受けると、人間は急性ストレス障害（ASD: Acute Stress Disorder）や外傷後ストレス障害（PTSD: Post-Traumatic Stress Disorder）などの症状を起こすことは、今や常識となっている。両親の死は子どもにとって最大の心的外傷である。このような危機を乗り越える心のプロセスを、フロイトは、「喪の仕事（mourning work）」と呼んだ。この喪の仕事を手伝うのが、心理療法家である。臨床心理士をめざす女子学生に対しては、モーニング娘になるよう指導してきた。ユング派の心理療法家が用いる箱庭療法は、言語を介することなく、コミュニケーションをとることができ、子どもの心理療法に広く用いられている。心理療法という観点に立って、この『禁じられた遊び』を観ると、大変興味深い。ミシェールは急性ストレス障害に陥ったポーレットに対し、水車小屋の中で十字架を用い、箱庭療法を行ったという見方ができるからである。

屋根裏部屋にいたフクロウは、フランス人なら誰もが知る知恵の象徴である。私にはフクロウがミシェールに対して、こう言っているように思えてならない。「ミシェール、君は両親を亡くしたポーレットに、できる限りのことをすべてしてくれたね。新約聖書の中でイエスは『わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである（マタイによる福音書25：40）』」と言っておられる。禁じられた遊びとは、君たちがやった遊びではなく、本当は、大人たちがやった戦争のことだよ。この言葉こそルネ・クレマンのメッセージだと私は考えている。「剣をとる者は皆、剣で滅びる」（マタイによる福音書26：52）はイエスの言葉であり、キリスト教平和主義の原点である。

ヴェルレーヌの「秋の歌 Chanson d'automne」『サチュルニアン詩集』(1867 年)

Les sanglots longs	Tout suffocant	Et je m'en vais
Des violons	Et blême, quand	Au vent mauvais
De l'automne	Sonne l'heure,	Qui m'emporte
Blessent mon cœur	Je me souviens	Deçà, delà,
D'une langueur	Des jours anciens	Pareil à la
Monotone.	Et je pleure ;	Feuille morte.

ヴェルレーヌの「秋の歌」と上田敏の「落葉」。これらの詩を並べてみると、外国語の「翻訳」がとても創造的な仕事であることに感嘆します。上田敏の言葉は現代の私たちには、外国語のようにさえ感じられます。フランスと日本、令和と明治。国と時代の隔たりを超えて何かしら伝わるものがあるとしたら、夏と冬のあいだにある「秋」が育んでくれる感受性のようなものがあるからでしょうか…？

上田敏の「落葉 (らくよう)」『海潮音』(1905 年)

秋の日の	鐘のおとに	げにわれは
ギョロンの	胸ふたぎ	うらぶれて
ためいきの	色かへて	ここかしこ
ひたぶるに	涙ぐむ	さだめなく
身にしみて	過ぎし日の	とび散らふ
うら悲し。	おもひでや。	落葉かな。

2022 年度総会開催予定のお知らせ

❖ 来年度の総会は、2022 年 2 月 11 日 (祝・金)、近鉄奈良駅近くの「野菜ダイニング菜宴」を会場に、開催を予定しています。懇親会を開催するかどうかは、日程が近づいてからコロナの状況等を見て判断いたします。

《2021 年度第 4 回理事会報告》……事務局 日時：2021 年 9 月 16 日 (木) 15:00～16:10。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、喜多、菌田、藤村、三木、杉谷。議題 1. 2021 年度会員数・会費納入：95 件中納入 79。議題 2. 7/15 理事会後の活動：(7/25) 第 57 回シネクラブ例会中止、コロナ変異株が拡大状況にあることを考慮。(8/22) 放送大学との共催公開講演会中止、放送大学からの申し入れのため。議題 3. 今後の行事：(10/9) 第 148 回フランス・アラカルト「アルザス、仏独の狭間に輝く特異な地域」講師濱恵介。シネクラブ例会・美術クラブ例会の年内開催は見合わせ。(2/11) 2022 年度総会を予定。会場は菜宴、懇親会は日程が近づいてから状況を見て判断。議題 4. Mon Nara。議題 5. その他：次回理事会 11 月 18 日 (木) 15:00～16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆赤や黄や緑のリンゴの果実 (pomme) が食品売り場に並ぶ季節になりました。リンゴの木 (pommier) の歴史は、人間の歴史と密接につながっているようです。およそ 450 万年前中央アジアのカザフスタンの天山山脈に自生し、そこから全世界に広がり、メソポタミア、ペルシア、ギリシア、ローマなど、古代文明が栄えた各地で栽培されるようになりました。☆古代ギリシア最古の長編叙事詩、ホメロスの『オデュッセイア』(紀元前 8～6 世紀)には、アルキオノスの果樹園にリンゴが栽培されていることが記されています。☆ローマの博物学者大プリニウスによれば、ローマ人は紀元後 1 世紀にはすでに 30 種類のリンゴを知っていたそうです。☆フランスではシャルルマーニュ(768-814)が農民にシードル用の果樹を栽培させ、シードル製造者に生産量を増やすよう布告を出したものの、シードルを飲む習慣はなかなか浸透せず、ビールが品不足になった 12 世紀直前に、ノルマンディー地方でシードルが広く飲まれるようになったと言います。☆ノルマンディーは、ブルターニュとともに、現在もフランスを代表する生産地として知られています。これらの地方を舞台にした文学作品には、リンゴの木のある風景や、登場人物たちがシードルを飲む場面がしばしば現われます。☆信州生まれの島崎藤村の詩「初恋」は、リンゴの花や木と美しい女性のイメージがとても印象的に結びあわされています。☆明治時代に本格的な栽培が始まった日本のリンゴは、今や世界一美味しいと言われるほどになりました。食後のデザートに生のリンゴやリンゴパイを食しながらリンゴの長い歴史を思うと、一口ごとの味わいも増してきます。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2022 年 2 月号は **1 月 30 日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」(2 月、6 月、10 月発行)又は「**Mon Nara 通信**」(4 月、8 月、12 月発行)に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2021 年 10 月号 numéro297

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司